

大学生に書かせる自分史の試み・1
－自分史の誕生と広がりの中で－

宮 地 啓 介

美作大学・美作大学短期大学部紀要（通巻第54号抜刷）

報告・資料

大学生に書かせる自分史の試み・1 —自分史の誕生と広がりの中で—

An attempt to have college students write their 'Jibunshi' autobiography : part one

宮地 啓介

キーワード：自分史、歴史叙述、社会科概論、大学生

はじめに

自らの人生について書き綴る「自分史」。この言葉は今や一般語といってよいであろうが、市民権を得たのは比較的最近のことである。その背景には、庶民が意識的に個人の歴史を語ろうとする試みとしての自分史が、ある時期以降に多くの人々によって書かれるようになった事実がある。

本報告は、平成2（1990）年から19年にわたって大学生に自分史を書かせる取り組みを続けてきた授業の記録である同時に、その内容を振り返る、いわば「授業とその担当者の自分史」である。これまでに授業のレポートである自分史作品は通算500編を超えている。その経過を記録しておくことが目的の1つである。また、今では趣味活動や生涯学習活動の1つとして広く行われるようになってきている自分史作りであるが、それを授業に取り入れ、大学生という若い年齢層の人々に自分の歴史を書かせることにはどのような意味があるのか。この点を考えるのが第二の目的である。

ただ、この19年にわたる「自分史」は、他の多くの自分史がそうであるように、その時代背景とともに記録しておきたい。授業での自分史作りは、まさに自分史が社会に広まり定着していくのと同時進行で続けて

きたものである。少し遠回りにはなるが、この報告では、まず授業での自分史作りの背景的な部分をまとめることを目標とした。

自分史導入の経緯と授業の展開

現在、自分史作りを行っている授業は、美作大学生活科学部児童学科の「社会科概論」という科目である。話の都合上、先にこの科目のカリキュラムにおける位置付けや19年間の変遷を概観しておこう。平成20年度からの児童学科専門教育科目は、科目群が7つの領域に整理・配列されており、「社会科概論」は教科関連領域に分類される。児童学科で取得できる小学校教諭免許状と関連して、小学校社会科で扱われる内容に関する概論という位置付けである。

社会科関連の概説科目はかつて複数存在し、科目名称も何度か変更がある。平成元（1989）年までは、「社会通論Ⅰ」と「社会通論Ⅱ」の2科目で、「歴史学（倫理社会を含む）」と備考の付くⅠが筆者の担当であった。自分史を取り入れた平成2（1990）年からは「社会通論Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」の3科目体制となり、「歴史学・含倫理社会」のⅡを担当（同時に「社会環境と人間生活」を扱うⅠも担当することになった。）平成10（1998）年からは地理・政治経済分野のⅢが廃止されて2科目体制に戻り、Ⅱは「社会科概論」と備考が

付くようになった。平成12（2000）年から、生活科と関連するⅠは内容に合わせて「生活概論」となり、Ⅱは「社会通論」と改称、平成15（2003）年に現在の「社会科概論」の名称に落ち着いている。わざわざこのような曲折を記したのは、現在の科目名称を見ただけでは、自分史作りとのつながりがすぐにイメージし難いからである。自分史作りを取り入れた頃は、3つある社会科関係の概論の1つが筆者の担当科目であり、しかも歴史学の内容を含むという条件も付随していた。広範囲にわたる社会科関連の内容を半期15コマですべて網羅することはそもそも無理な話であるが、概論は他に2科目あり、自分がカバーしきれなかった部分は他の担当者がある程度補ってくれるだろうという気楽さと、筆者の専門である歴史関係の内容という恵まれた事情のおかげで、「社会通論Ⅱ」と自分史作りが結びついたのである。

では、その「社会通論Ⅱ」で自分史を書かせてみようと思いついたのはなぜか。これには次のような3つの事情が絡んでいる。まず、この概論を担当するようになって2年間、前任者から引き継いだ「モノ作り」に学生とともに励んでいたが、常に何か新しい自分独自のものを盛り込みたいという欲求を感じていた。そのような時、『自分史の作り方』と題する一般向けの趣味・実用誌〔主婦と生活社、平成元年11月刊〕を手に入れて興味を覚えたわけである。「モノ作り」と同じように、「自分の歴史を作る」でもよいだろうと考えたのである。あと1つは、「授業で取り組む『自分史』」という新聞記事で、芝浦工大柏高校（現芝浦工大柏中学高等学校）教諭、矢吹浩二氏の実践と「自分史図書館」の話題を目にしたことである。この新聞記事は、平成3（1991）年に自分史選択者用の資料で、前年の作例に続く「その他の自分史の例」として使っている。恐らく、授業で自分史作りを始めたばかりであったため目にとまったのであろう。「高校生で成功している実例があるのなら、大学生にもできないことはないだろう」と、この記事が自分史導入を後押ししてくれたように思う¹⁾。

ともあれ、平成2年度の「社会通論Ⅱ」では、初回

の導入で、これまで行ってきた「手仕事によるモノ作り ―昔の人々の知恵に学ぼう―」に加え、「自分史作り ―自分のことを材料に歴史を書いてみよう―」という新テーマを学生に呈示した。前者は先輩たちの取り組みがレポートとして残っており、具体例を挙げて学生を誘い込むことができたが、自分史の方は実例がまだ何もない状態である。前述の『自分史の作り方』からの抜粋を参考資料として配布し、事前に考えた自分史作りの趣旨を語った。そのような急ごしらえの勧誘に乗ってくる学生がよくいたものだと今になって思うが、最初の年には4人が自分史作りに挑戦した。自分史作りの指導はまだ手探り状態で、現在の授業を考えると、その頃の指導内容は多くの部分が取り組む学生任せであったように思う。それでも、選択者に恵まれて、この年の作品には後年と比べても遜色の無い自分史が含まれていた。自分史の場合、書く人が書きたいことを持っていれば、それなりに書けるものようである。もっとも、これは自分史に指導者は不要という意味ではない。授業として学生に取り組ませる以上、各人各様の個性ある歴史が書けるように配慮しつつ、全体としては授業の目的に適合させる努力が要求されるのは当然である。この点はまた稿を改めて論じることにはしたい。

こうして4人からスタートした自分史作りであるが、翌年が8人、3年目に23人と二桁台に乗り、その後はだいたい20人台から40人前後の範囲で今に続いている。すでに述べたように、授業のテーマはモノ作りと2本立てとなっており、期末レポートは受講者がどちらか希望の方を選択する。この基本方針は今も変わらない。自分史で書く内容の多くがプライバシーに関わる事柄であり、それを授業で全員に強制する訳にもいかないだろうという配慮もある。そのため、2つのテーマの選択者数は毎年変動し、多くの受講者がモノ作りに流れる年もあれば、自分史が大半を占める年もある。グループ作業がふつうのモノ作りに対し、自分史のレポートはその性質上1人1作である。自分史が多いとその分読まなければならないレポート数も増え、成績評価の際に大変になる。後で報告にまとめる

計画があったわけではなく、今となつては正確な数は把握し難いが、平成18年度までで500編を超え、平成20年度に20人余りが取り組んでいるのを入れると550編余りになる。

この550余りという数であるが、先述の芝浦工大柏高校の場合、昭和55（1980）年の同校開校以来の独自の必修教科ということもあり、記事の時点で約3000人が自分史を書いていた。これと比べれば、550という数はささやかなものである。ただ、学科全体の学生数と授業の選択者数、その中での自分史選択者の数を考えれば、10数年にわたって毎年少なくとも20名以上の学生が自分史を書き続けてきたことは、それなりに評価してよいと思う。美作大学（平成14年度までは美作女子大学）は岡山県北の地方都市に所在し、生活科学部1つの小規模な大学である。児童学科の入学定員は80名（平成18年度までは60名）であるが、自分史を導入した頃は学生数が少なかった時期に当たり、平成2年度の3年生（授業開講の学年）は40名程度であった²⁾。

昨今、人前であらたまつて自分自身について語ることに抵抗がある若者も少なくないが、そのせいで自分史が敬遠されるというわけでもないようだ。また、共学化により平成16年度からは男子も「社会科概論」を受講するようになった。しかし、これまでのところ、実数として自分史を書いた男子学生はそれほど多くない。ただ、児童学科における男女比と自分史選択者の変動を考えると、自分史が男女どちらかにとくに好まれている（あるいは敬遠されている）ということはないようである。当面は自分史の選択者は無くなりそうにないし、担当者が授業内容を見直してこのテーマを廃止しない限り、これから先も存続していだろう。授業で自分史作りをさせる目的とは別に、なぜ自分史を書くのか、学生たちの思いは自分史作りの意義を考察する際にまた検討しなければならないが、さしあたり、受講者の性質として次の2点を指摘しておいてよいだろう。1つには、児童学科に入ってくる学生はもともと子ども（広くは人間）に興味・関心があり、多くの者が幼稚園や小学校の先生など人々を指導する立

場の職業人をめざしている。そのような学生から成る「人懐っこい」クラスの雰囲気や、他人の前で自分を語ることへの抵抗感を和らげていること。また、現在の開講学年である2年次は、その年度にほとんどの者が20歳の誕生日・成人式を迎える時期に当たる。これを1つの区切りに、記念の成長記をまとめておこうという意識が働くという事情が考えられる。

自分史とは何か

「自分史」という言葉はどのように捉えられ、使われてきただろうか。また、自分史作りはどのようにして広まってきたのだろうか。本章では、自分史とは何かというその発想の根幹に関わる点も含みつつ、自分史普及の背景を見ていく。

1. 自分史の誕生と普及

自分の歴史という意味での自分史という言葉は、古くから存在したはずである。しかし、それを歴史叙述の1つの方法論として意識的に提起したのは、色川大吉『ある昭和史——自分史の試み』（中央公論社、1975年）が最初である。エリートの歴史に対する「民衆史」を模索中であつた色川は、単なる全体史に対する個人の歴史ではインパクトに欠けると考えた。主観を排し客観的記述を旨とするのが常識とされていた当時の歴史学会において、「自分」を全面に打ち出すことはかなり挑戦的なことであつたが、「自分の主体性」を意識し、激動の昭和を生き抜いた「庶民が主人公」になり貴重な体験を書き残すという2つの意図を込めて、あえて「自分史」という名称を使ったと述べている³⁾。これは、必ずしも色川が自分史という言葉が最初に使つたという意味ではないし、彼自身が後にこれを振り返って「叙述としては失敗だつた」と自己採点しているように、まだこの時点では、理論の実際への適用という点で模索段階であつたのかもしれない⁴⁾。ともあれ、色川はそれまで定まつた名称のなかつた庶民の生き様を書き記す文章運動の成果に、理論的基

礎を備えた「自分史」という用語を与え、その方法論に基づく実例を呈示した。こうして、歴史の専門家によって、無名の庶民の人生を書き記すことに価値が認められ、1つの名前が与えられたことで、進むべき道筋が見えてきたのである。それ故に、今日そう見なされているように、この分野の開拓者が色川であることは間違いなし、今に続く自分史ブームの出発点は、1970年代半ばと考えるとよいだろう⁵⁾。

「自伝」や「自叙伝」という表現はその後使われ続けるが、やがてより新鮮で現代風の表現として「自分史」を名乗る例が現れ、その言葉を目にする機会が増えるにつれて、一般の人にもなじみのあるふつうの言葉になっていく。次は、このような過程を言葉の定着という面から検討してみよう。

「自分史」という用語が誕生したのは70年代であったが、定着したのは比較的最近である。そのため、筆者が授業に導入した1990年頃は、時々見かける言葉にはなっていたが、まだ国語辞典には収録されていなかった。これと同じ頃、自分史講座の内容を本にまとめた中里富美雄は、身近な言葉として目にするようになったのはここ10年くらいのことであり、「まだどの辞書にも入っていない新語ですが、やがて私たちの愛用語になるだろうと思います」と書いている⁶⁾。

この経過を代表的な辞典類に当たってみた範囲で紹介すると、以下の通りである。例えば、三省堂『大辞林』の第三版(2006年)では、「自分史」とは「自分の人生をみずから書きつづった記録。自伝。」とされている。これはもともと「自伝」ないしは「自叙伝」の項で記されていた内容であり、90年代半ばまで多くの辞典では「自分史」の項は設けていなかった⁷⁾。言葉の公的な認知という点では、平成7年度の『国民生活白書』(経済企画庁)が「戦後50年の自分史——多様で豊かな生き方を求めて」という副題を付けて刊行されたことが注目される。色川も、自らの著作集への解説・解題の中で、「自分史」という言葉の定着の指標としてそのことに触れている⁸⁾。恐らく、その頃までには、この言葉は一般国民にとって違和感のない程度に普及していたと同時に、まだ陳腐さを感じない程

度の新鮮さも持ち合わせていたのであろう。後述するように、自分史関係の様々な賞や団体の創設が相次ぐのもちょうどこの頃であり、90年代半ばは1つの画期と見るができる。

初めて「自分史」を取り上げたのがどの辞典であったのか確認できた訳ではないが、岩波書店『広辞苑』の第五版(1998年)では「平凡に暮らしてきた人が、自身のそれまでの生涯を書き綴ったもの。自伝。」と記されている。「平凡に暮らしてきた人が…」と但し書きが付いていることに留意すべきであろう。ここでは、文字通りに自分の人生について自分で書くということだけでなく、ごく普通の庶民が書くという点に、従来の「自伝」との違いが意識されている。同様のニュアンスの違いを出そうとする意識は、『岩波国語辞典』第六版(2000年)にも見ることができ、語義の解説の後に「従来の自叙伝よりも自由に自分の体験や気持ちを綴ったもの」と補足的説明がついている。「従来の自叙伝よりも」と比較対象を明確にした上で、それより内容・形式、さらには執筆の姿勢などにおいていっそう自由なものと認識されている。この他に、要領よくまとめているのが、小学館『日本国語大辞典』第二版(2001年)である。

「自分自身の歴史。特に、自分のこれまでの人生をつづり、本にまとめたものをいう。著名人の書く自伝、自叙伝に対して、庶民の個人史という意味合いで用いられ、昭和末期ごろからブームとなった。」

この解説は、先の『広辞苑』などと同様に「庶民の個人史」という自伝・自叙伝との違いを意識するとともに、「本にまとめたもの」と「昭和末期からブームに」という2つの特徴を付記している。

以上のような辞典採録の経過から見ると、自分史ブームは昭和から平成に移り変わる時期に本格化し、10年くらい経過する間にふつうの人が自分の人生について書くことが一般化するとともに、「自分史」という言葉も広く知られるようになったこと、その際、ほぼ「自伝」や「自叙伝」の同義語ではあるが、もう少し自由で庶民的なニュアンスの伴う言葉として定着してきたことがうかがえる。

それからさらに10年くらい経過した現在（2008年）、言葉の使用状況はどうなっているであろうか。ここでは、CiNiiの論文検索で得られたデータを利用し、別な材料から言葉の使用歴をたどってみよう。検索の結果、得られた該当件数は「自分史」が570件であったのに対し、「自伝」は2062件、「自叙伝」は660件であった。〔2008年8月19日検索〕この結果では総数が一番少ないのが「自分史」であり、「自伝」・「自叙伝」は通算の数が多いだけでなく、最近でもよく使われていることが判明した。

「自伝」・「自叙伝」の該当項目の中には、「自分史」と言葉を置き換えても何ら問題ないような事例も含まれている。その場合は、「自伝」は昔からよく使われてきたなじみの言葉であるとか、短くて簡潔であるからなど、使う人の好みで選択されていることになる。しかし、多くの例は何らかの意味での有名人に関わる記事であり、今でも辞書の定義にある「自分史」との使い分けは意識されているようだ。ちなみに、筆者が授業導入時に参考にした一般向け実用誌の「自分史あれこれ」によれば、自分史の実物を参考に見てみたいと思っても、自費出版している人は少なく、なかなか実物にお目にかかる機会がないものであるが、いわゆる有名人が書いた「自伝や回顧録も見方を変えればすべて自分史」である⁹⁾。ここでは、自分史が自伝・回想録とは別の独立した新ジャンルであるかのように書かれているのが興味深い。

また、この検索でヒットするのは雑誌の論文・記事のタイトル（含副題）である。タイトルに使うからには、たまたま文中で言及するのは違い、意識して必要があって「自分史」という言葉を選んでいると考えてよい。ただ、雑誌といっても、データベースの性格上、一般誌よりも学会誌、紀要類、業界専門誌の比率が高く、発表の場という点を考慮すると偏りが予想される。作成された自分史の一部しか拾われていない可能性があるからである。

どのように公表するかということも、執筆内容とは別に、書き上げた自分史を多くの人々に読んでもらう上では重要である。ある程度以上文章のまとまりと

分量があれば、前述した辞書の説明のように、本として出版するのが最もオーソドックスなやり方であろう。自分史がしばしば自費出版とセットで語られ、自費出版を振興する団体が自分史を対象にした賞を設けているのも故無しとしない¹⁰⁾。ただ、自分史ブームが始まった頃は、まだ現在ほど自費出版を引き受けられる出版社も多くなかったはずである。ワープロが普及し、さらにワープロソフトで作成した原稿がそのまま入稿できるようになるまで、一般の人にとって「活字にすること」、とりわけ本を出版することは、費用と手間の点でかなり敷居が高いことであったと想像できる。ブーム初期の80年代には、文章を書くサークル等が刊行する同人誌やそれに類する冊子類が、経済的にも文章量の点でも負担が少なく、発表の場としては中心であったと考えられる。この部分は今回の検索対象には含まれていない。他方、公的な性格の強い学会誌、業界誌などにおいても、特定分野の関係者が過去を振り返る記事が掲載されることが少なくない。この種の記事は確実に拾われている。

今の話と関連して、検索結果の一覧を眺めていて気が付いたことがある。一般に、自分史は文章を書くことから「文芸」のイメージが強い。また、自分史講座の指導者に国語や文学関係の人が多いのも事実である。ところが、「自分史」の検索結果では、意外にも理系の技術者が書いた自分史が多い。とくに初期に目立つ傾向で、80年代初めからしばしば登場する。その後は全体の数が増えて比率こそ下がっているものの、今でも技術分野では「自分史」がタイトルによく使われている。面白いことに、「自伝」や「自叙伝」の検索結果ではこのような傾向は見られない¹¹⁾。これには先述のデータベースの性格も関係しているはずだが、技術者が（趣味活動としてではなく）本業で自分の足跡を振り返ろうとすれば、発表の場が学会誌や業界誌などに限られるという事情もあるようだ。

それにしても、だれかが「自分史」という新しい言葉を採用しなければ、技術分野でそのような「流行」は生まれなかったはずである。そのことは、検索結果を利用する際の注意点も想起させる。ある雑誌で「自

分史特集」が企画されると、その特集関係の記事がまとまって該当するし、連載では特定の人の書いた記事が何件も登場する。これは全体数の少ない初期にはかなり影響がある¹²⁾。件数の多さがそのまま自分史作りの社会的な広がりを反映する訳ではない（とくに初期はそうである）ことに注意しなければなるまい。

このような限界はあるものの、おおまかな普及経過をつかむことは可能であろう。検索結果では、70年代には年に1件該当結果があるかないかという状態であったものが、80年代には特集的なもので時折多い年があるようになる。明らかに一段と増えるのが90年代後半からで、平成8（1996）年に20件を超えて以来、30件前後の年が続いている。今回の検索結果に表れる範囲でいえば、次のような事情もある。平成10（1998）年春に、野口悠紀雄『「超」自分史ガイド』がダイヤモンド社から出版され、それを機にしばらく自分史のすすめの特集が『週刊ダイヤモンド』で続いた。それはさらに創刊85周年記念の事業として「自分史」大賞創設へとつながり、この賞は第5回まで実施されたが、そのたびに同誌で関連記事が掲載されたこと、なによりも「超」〇〇法で有名な野口氏の知名度、これら一連のできごとが一般の人々に「自分史」を広める上で影響力があったと考えられる。このような増加傾向は、すでに述べた言葉の定着や自分史関係の賞・団体の登場時期とも一致している。代表的な自分史関係の賞を挙げると、「北九州市自分史文学賞」、「シニア自分史大賞」、「私の物語・日本自分史大賞」、「日本自費出版文化賞」などがあり、最近でも町おこし関連の事業として自分史コンクールが創設されている。これらのうち、森鷗外をはじめとするゆかりの作家が多く、市立文学館も有する北九州市の文学賞は、筆者の授業と同じ平成2（1990）年とスタートが早いですが、他はいずれも90年代中頃の創設である¹³⁾。

また、検索結果に登場する記事・論文の内容は、大きく3つに分けることができる。①個人史としての自分史。最も多いのがこれである。②自分史執筆についての考察。大半を占める一般向けの記事では、要する

に「自分史のすすめ」的な特集である。いかにすれば簡単に充実した自分史が書けるか、様々なアイデアを紹介しながら、自分史作りを勧める連載記事であることが多い。一方、数は少ないが、自分史の方法論を真正面から考察するものもある。それと関連するのが、③素材・手法として自分史を使った研究である。歴史に限らず幅広い分野で、個人の記録が研究材料として使われるだけでなく、心理学の分野などにおいて、自分史を書かせることが手法として用いられる場合も多い¹⁴⁾。書く人しだいで、このように多様な自分史とその利用法があることは、自分史作りが多くの魅力と可能性を含んでいることの証拠でもあろう。

2. 自分史の内容と形式

直前に述べたように、多様な自分史があり得るということは、自分史の「内容の広がり」という「社会への広がり」とは別の問題も提起する。

色川は橋本義夫の「ふだん記」運動を自分史の前身・開拓者的な役割を果たしたものと見なしており、「ふだん記」は自分史的なものを含むもっと広範囲の概念としている。そして、「ふだん記」には「時間軸を立て、ある一貫性をもって記述した自伝に近いもの」である「生い立ちの記」、主題毎に書かれて統一性のない回想記、（詩や画文・エッセイなど）形式を問わない庶民の体験記録など、雑多な内容の文章を包摂していたという¹⁵⁾。一見すると、この説明は、色川の考えで自分史と言って良いものは「生い立ちの記」であると読めそうであるが、はたしてそうであろうか。というのは、別の箇所では、自分史は「各人各様、それぞれの個性によってスタイルも論点も中身も違ってよい」と断言し、「文章表現だけに狭く限定する必要はない」とも述べているからである¹⁶⁾。辞書の定義にもあったように、一般に自分史は旧来の自伝・自叙伝に比べてより自由なものと見なされていることも想起すべきである。つまり、いかにも自伝らしい形を備えた「生い立ちの記」だけでなく、他の回想記や体験記録なども、その人の人生について書き綴ったものと見なせれば、一応自分史と考えられるのであ

る。

他の例も挙げてみよう。中里富美雄は、厳密には自分史は自伝・自叙伝と多少違いがあると述べている。つまり、自伝・自叙伝は自分史の中の1形式であり、それに対して、自分史はもっと広く自由なもので、文章でなくとも自分の歴史を示すものであればよいという。先にも紹介した一般向け実用誌では、自分史のつくり方には決まったルールはなく、好みによりどんな内容・テーマでもよいとして、幼年記、青春記、子育て記、趣味・スポーツ記、旅行記、半生記が例として紹介されている¹⁷⁾。

このように、自分史についてはその「幅広さ」が目につく状況である。橋本が唯一無二のものである「自分の歴史を書くことから、庶民は文章を始めるべきである」と勧め、色川が歴史と切りむすぶ主体性、すなわち自分と歴史の接点を書くことから「自分×史」なのだとして述べているように¹⁸⁾、基本には「自分の歴史を書く」ことが厳然とあるのだが、その書き方や語り口はいろいろあってよいという考えである。色川は歌に託しても詩で綴ってもよいと言い、中里は自分史の形式として、自伝・エッセイ集・文集・日記・写真集など、10種類のスタイルを紹介している¹⁹⁾。

このような許容範囲の広さが、一般の人々にとって取っ付きやすさにつながると考えることもできるので、これはこれで自分史のメリットといってもよい。ただ、自由が気楽でよいといえるのは、ある程度までの範囲に限られる。趣味として追究するのなら、内容も形も人それぞれの好みで決めればよいことであるが、授業として複数の人が取り組む場合は、評価の都合から目的・手段・方法など統一しなければならない条件もある。この点について、筆者が授業の際に使っている例でもう少し説明を続けよう。

自分史と日記はどこが違うのだろうか。両者の間には、①執筆の姿勢と②記録の時点による性格、この2点で違いがある。①日記はふつう自分自身のために書くものであり、他人が読むことは想定されていない。もちろん、作家などが後々公開や出版をされることを意識して書く日記という例はあるが、一般の人が日記

を書く際にそのような意図を込めることはまずないだろう²⁰⁾。それに対して、自分史は自分のことを他人に説明する立場で書く。そのため、自分のことをまったく知らない人が読んでも解るように説明しなければならない。その際、自分の想いや記憶だけに頼らず、できるだけ客観的なデータを援用して書いた方が記述も客観的に仕立てやすいのであるが、重要なのは、説明の都合上、これまで自分が関わってきた人々のことも書かなければならないという点である。いつも授業で話すことだが、「名前は自分史だが、自分以外の人のことも書く」ことになるのである。また、②日記はその時々記録であり、書いた時点での自分が記録されている。それに対して、自分史は現在の自分が過去の足跡を振り返って書くものであり、今の自分が捉えた自分がそこに表現されている。これは「だれが」書くのかという問題ともつながっている。ともあれ、日記はどちらかといえば史料であり、自分史の材料になるものと位置づけられる²¹⁾。

以上のような違いを踏まえると、第一に、他人に読んでもらうという前提（執筆姿勢）の有無が重要である。色川は自分史の限界に関連してこうも述べている。自分史は個性的である方がよいとはいえ、「自己流すぎて他者との共通性（他人にも理解できる要素）を全く欠いてしまうのも困る」のだと²²⁾。そのため、あまりにも断片的すぎる記述（できごとを列挙しただけの年表など）やイメージ中心の詩や画像などは、そのままでは他の人が共有できる部分（接点）が少なく具合が悪い。日記と並んで、写真も自分史に利用できる代表的な材料である。写真のイメージ喚起力は日記以上に強力である。自分史の準備作業で一番楽しいのが、アルバムを開いて昔の写真を眺めている時だというのもよく聞く話である。だから、「写真アルバムも立派な自分史」といえなくはないのであるが、そのままでは断片的すぎて、他人にはそれらが何の写真なのか、どのようなつながりがあるのか解らないのがふつうである。1枚1枚について、いつどこで撮ったものか、写っているのはだれなのかなど、背景説明が必要になる。つまり、写真だけでは欠落して

いる情報を補うために説明を次々に作っていくことが、そのまま自分史の叙述を作ることになるのである²³⁾。やはり、他人が読む際には、話のつながりをたどれる程度の、連続性のある説明があった方がよいのである。

これはさらに、第二点の、自分史は現在の自分が過去の全体を振り返って書くものという性格とも関連してくる。今の自分が捉えた世界がそこに表現されるといっても、実際には全体像を一度に書き出すことは不可能である。ずばり1枚の絵や写真で表現することはできなくはないが、それでは他人が理解し難い。話を整理し、(説明しやすさの点で)時間の流れに沿って順々に、少しずつ話題を書き連ねていくのがふつうであろう。つまり、その時その時の、点の記録である日記や写真などの材料は、整理し説明を補うなどの「まとめる」作業をして、線につないでいくことで歴史叙述になっていく。授業のテーマとして「歴史を書いてみる」と掲げているからこじつけるわけではなく、結局、ある程度連続性のある話の方が、書く人も読む人も解りやすいのである。したがって、様々なスタイルを許容はするが、「望ましい形式は、やはり自分の言葉で自伝風に書き綴ったもの」²⁴⁾という話に落ち着くのではないだろうか。

3. だれが、何のために書くのか

自分史について、「だれが」書くのかという問いは決して愚問ではない。書くのは自分自身と決まっていますが、その自分というのがいかなる人間なのか、それ自体が問題となるからである。歴史一般についてそうであるだけでなく、自分史とは自身を見つめ直す自己認識の試みでもあるという点で、叙述者はいっそう重要な問題である。

今どき「真実は1つなのだから、歴史はだれが書いても同じになるはずだ」と信じている人はどのくらいいるのだろうか。そこまで単純素朴な信仰でなくとも、逆に、およそ歴史を専攻する人なら、ほとんどすべての人が同意しそうな主張もある。例えば、「歴史叙述は、主観に頼った恣意的な解釈を排して、可能な

限り事実に基づいた客観的な記述を心がけるべきだ」という主張である。もちろん、筆者もその通りだと考えているが、だからといって、同じできごとを描いても、同じ歴史叙述にはならないことも明らかである。それは、必ずしも歴史家の未熟・過誤・怠慢・無能などのせいで客観性が損なわれた結果、生じるわけではない。歴史には、過去のできごとなど、客観的なもの自体としての、いわゆる「存在としての歴史」の側面もある一方で、それらの事実を「どう捉えるか」、さらに、捉えた歴史を「どう語るか」、つまり認識や表現に関わる側面もある。そのような多面性を併せもった歴史を、主観と客観という二元論できれいに割り切ろうというのがそもそも無理な話なのである。

自分史の話に戻ると、同じ人の半生であったとしても、描く人である自分自身が歳とともに変わっていけば、捉えられ表現された自分の半生も違ってくるのは当然である。これは「大学生が書く」意義とも関連する問題であるが、どの年齢層の人についても共通していえることでもある。一般的に、その人のもつ表現力は歳とともに豊かになっていく。とくに文章で表現する場合は、語彙力や文章を書く経験が大きく影響し、それとともに記述の一貫性・統一性など、完成度の差も生じる。さらに、その人の人間的・社会的成熟が、世界の広がりとそこにおける自身の位置付けの違いを生む。授業で、20歳の頃に書いた自分史と30歳・40歳で書く自分史とは違うから、機会があればまた自分史作りを試みたら、と勧めているのはそのためである。自分史は自己認識の表現である。生まれてから現在までの半生を通して語るとは、まさに自分は「いかなる生まれ育ちの人間であるか」を説明しているのであり、それはすなわち自分の「人となり」を語ることに他ならない。社会のできごと等に関する一般的な歴史と違って、自分史では執筆者の人柄が色濃く(悪くいえば露骨に)出やすいものなのである。

では、執筆者はそういう性格のものだとして、自分史を書くのは何のためだろうか。色川は、「神は細部に宿る」を言い換えて、どんな無名の庶民(細部)にも、その時代の真実(神)が宿っているのだから、そ

れを認識し、表現することに意味があるという。ところで、別な箇所では色川は、実践家・教育者としての橋本と対比して、自分は庶民の人生記録を貴重な歴史資料と見る歴史研究者であると、2人の違いを述べている。筆者も、期末レポートとして集まった自分史の山を見ると、つい後者のような思いにかられてしまうことがあるが、色川によれば、そういうことは歴史研究者の勝手な理屈にすぎない。「自分史は虚心に自分の人生の真実を書けばいいのであって、それが社会にとってどれほど役に立つかということを考える必要はない」というのである²⁵⁾。

「社会にとって」などと肩肘張らずに、「思い出世界へ時間旅行」（野口悠紀雄『「超」自分史ガイド』）と、軽い構えで楽しんでよい。自分史作りにはいくらでもその効用を見つかることができる。もちろん、筆者が授業の課題として書かせる場合の効用は、それなりに考えている。「社会科概論」という授業であるから、自分史には「自分の視点や経験を軸に社会を捉えてみる」という理由が付けられている。だが、それは授業担当者の「理屈」であって、学生一人一人にとって自分史を書くべき理由になるとは限らない。また、庶民の生活記録・人生記録として価値があるのは確かであるが、授業のレポートとして提出された自分史は、成績評価が済んだらそれぞれの学生に返却している。プライベートな内容を記した私的な著作物であるから、筆者の手元に残っても困るのである。一応、後輩たちの参考とすべく、できの良さそうな作品を選んで写真を撮って記録を残しているが、それらは一部に過ぎない。書いた学生にしても、それに手を加えて後で印刷出版したという話は聞かない。ということは、20年近く自分史作りを続けてきながら、毎年、貴重な歴史資料を散逸させているといえなくもないのである。その一方で、筆者が期末レポートとして自分史を読む際に、社会的価値という観点から評価をしているわけではないのも事実である。むしろ、「虚心に」書かれて飾り気のない、その人らしさが素直に出た自分史が読んでいて好ましい。当然予想できることだが、真剣に取り組んだ者ほど得るものも多いとい

う傾向は、提出された自分史を見れば明らかである。一読すれば、作者の達成感や充実感の差は歴然としてい

るからである。だが、授業として書かせているからには、作者が満足していればそれでよいというわけにはいかないだろう。学生にとって自分史作りの価値とは何か、これは紙幅の関係で次回の課題としよう。結局、効用はいろいろ考えられるが、それらは「後から付いてくるもの」と考えた方がよいようである。それより、自分史作りでは、まず書く人自身が興味を持ち面白いと思って取り組むこと、これが何より大事なことだと思う。最近読んでなるほどと思った一文を次に紹介しておこう。「意味や効用があるから歴史を書くのではない。」それは人生のようなものである。われわれが人生の意味や効用を知って生まれてきたわけではないし、それを知っているから生きているのではないように²⁶⁾。

4. どのように描くのか—叙述の立場・視点について

自分史作りに何らかの意義があるのは確かだとすれば、「後から付いてくる」効用をあれこれ考える前に、まずどこかの部分を書いてみるのが肝要である。その際、どのようにすれば最初の一步を踏み出しやすくなるのか、さらにその後も滞ることなく充実した内容の自分史を作っていけるのか、これらは自分史作りを指導する人が常に考えることであり、多くの「自分史のすすめ」特集や自分史マニュアル本がそれぞれ説くところである²⁷⁾。筆者の場合も、長年「社会科概論」の授業で意図する自分史を書いてもらうための工夫をこらしてきた。実は文章表現を主にする場合、叙述の問題は自分史の大半を占める本文の書き方の指導に直結するのだが、それについては次回の報告で扱うこととして、ここでは自分史の理念に関して叙述の立場・視点に関する議論を片付けておこう。

自分史は「自分でつくる、人生のドキュメンタリードラマ」。筆者が参考にした雑誌の、「自分史とは何か」という章の小見出しである²⁸⁾。これに比べると、それに続く「自分史は1冊の立派な草の根の民衆史と

なりえるものです」などといった解説文は、どこからか借りてきたような表現で説教臭い。それはともかく、「ドキュメンタリードラマ」というのはイメージ的によく分かる表現である。では、自分がVTRカメラのような記録装置になったつもりで、ひたすら事実関係を書き出していけば、自然にドキュメンタリードラマができ上がるのだろうか。ことはそのように単純ではない。

第一に、叙述の素材となるデータの性質が問題である。庶民の場合、有名人と違って、親がつけていた育児日誌などを除けば、ふつうは他人が自分についての詳しい記録をまとめてくれているなどということはないものである。もちろん、写真、手紙、母子手帳、通信簿、昔自分が書いた絵や作文、テストや連絡帳など、様々な記録物が保存されていて、自分史でも客観的なデータは利用できなくはない。だが、多くの場合、それらは断片的で未整理のままである。長期にわたって日記を書き続けてきた人以外は、自分の昔のことについて知る上で一番頼りになるのはやはり本人の記憶である。自分で覚えている部分が少ない幼少期については親兄弟などの年長者に尋ねることになるが、その場合もだれかの記憶が頼りである。ここで記憶の性質をあれこれ議論している余裕はないが、VTRのような均質で一定不変の記録と同じでないことは確かであろう。それを限界と取るか、積極的に活用するか、見解は分かれる。

記憶はしばしば曖昧で時には変容するものであるが、ここでの議論に関わるのは、叙述のために記憶を呼び起こして使おうとする時の問題である。色川は、現在の位置から過去を振り返る回顧的な方法について、「人は自らの過去の経験を現在の価値意識によって選別したり、『時のフィルター』にかけて取捨したりするものだ」という問題点を挙げている。実は、自分の過去をありのまま正直に書くのは案外難しいことではよくある話である。色川は「とくに他者との特殊な関係を書く場合には、ペンを折ったり空白にしたりする例が多い」と指摘し、そこに自分史の限界を見てい

る²⁹⁾。

一方、人は楽しいことはよく覚えているし、その時は辛く苦しかったことも、時間が経てば懐かしい思い出になったりするものである。いわゆる記憶の浄化作用は、それはそれで活用すればよいという主張がある。現実社会で使用する履歴書を改ざんしては問題であるが、自分の頭の中で「美化されたノスタルジアの世界に遊ぶ」のであれば、その人の自由である。事実関係に手を加えなくても、事実に対する評価をプラスに修正する手もある。これらを積極的に活用すれば一種の自己カウンセリングにもなるというのである³⁰⁾。

このように、多くを当事者の記憶に頼る点についてはメリット・デメリット両面の見方がある。とはいえ、叙述の厳密さや精確さにこだわるのは歴史研究者の場合であって、一般の人が初めて自分史を書いてみようという場合には、むしろそれを気にしすぎない方がうまくいくことが多いようである。もちろん、ドキュメンタリーであるから、改ざんや意図的な脚色はしないのが基本原則である。ただ、それは「虚心に真実を語る姿勢を意識する」という程度でよいのではないだろうか。

データの客観性が議論になるのは、しばしばデータの記録と保存（記憶）装置を、ドラマの編集者（と同時に主演者）自身が兼ねているためであるが、この話はさらにカメラの視点はどこにあるべきなのかという議論に発展する。同時代を対象としたドキュメンタリーであっても、取材と編集の過程は時間的にも空間的にもズレがある。自分史の場合、できごとと叙述の場の間には、近況であっても2・3年、昔の話なら若い人で数年、年配の人なら数十年の隔たりがあることになる。では、ドラマを写すカメラは、人生の各時点である歴史の現場か、それともドキュメンタリー制作の場である現在か、どちらにあるように叙述するのがよいのだろうか。

この点は、色川が初めて自覚的な同時代史のための自分史に挑戦した時にも悩んだことであり、後に2つの立場・視点を無自覚に混用したため区別が曖昧に

なつたと反省している³¹⁾。すなわち、叙述の方法としては、①追体験的方法と②省察的な方法があり、①は「かつて自分が体験したその状況に身を置いて…その渦中の人として自己を描く」のに対し、②は「今自分が立っている現在の位置から、かつての時代の枠に縛られていた自分の行動と思想とを反省的に観察する。」色川は、②は過剰な主観の抑制や自己相対化の認識を深めるために補助的に使うべきで、十分に抑制の効いた①が叙述の基本だとしている。2つの方法にはそれぞれ欠点というか注意すべき点があるのだが、②の現在からの回顧的手法は、超越的視点にとらわれて「上から見下ろす」危険があるというのである。これは個人史を描きながらも常に全体史を意識する、歴史家ならではの懸念であろうが、はたして大学生にそのような超越的な視点があるだろうか。確かに、②を強調すると過去を恣意的に再編してしまう危険性はあるが、筆者はむしろ、②の立場・視点を取り入れることが（色川も認めるように）自己相対化・客観化のきっかけになるとも考えている。ただし、ドキュメンタリーとしては①の方法による叙述が中心になるはずであり、歴史の現場に身を置き、ありのままの姿を伝える叙述法を主とすべきであるということに異論はない。

おわりに

メインタイトルの「大学生に書かせる試み」という割には、経過報告や背景に属する話が多くなってしまった。とくに、前半部はそうである。授業での指導など具体的で面白そうな話は次稿に先送りした部分が多いので、ますますその印象が強くなっただろう。しかし、90年代以降の自分史の普及・定着という文脈の中で自分史作りを振り返ることが、今回の目標だったという事情もある。

また、筆者にとっては、今回改めて「自分史とは何か」という基本的なイメージをたどり直したことで見えてきた収穫もある。本稿でたびたび引用した色川大吉『自分史』と中里富美雄『自分史入門』は、どち

らも自分史作りを授業に取り入れて間もない頃には出版されたものである。当時、それらを授業の参考用に入手したことは明らかであるが、なぜかこれまでじっくりと読んだことがなかった。とくに、後者は文章表現など具体的な指導に使える話がたくさん入っているのに、あまり活用した記憶がない。むしろ、自分史作りの開始後は、授業での学生たちの反応を手がかりに、試行錯誤で積み上げた自己流指導でやってきた。

ところが、書架で背表紙だけ眺める状態になっていた両書を久しぶりに取り出して読んでみると、なんとも平凡な結果が見えてきたのである。つまり、表面上の形こそ自分独自ではあるが、筆者が悩みながらいろいろ工夫してきたと思っていたことは、そのほとんどがすでに先達が悩み工夫してきたことだったのである。その意味では十数年も遠回りをしたことになるが、この間の経験があるからこそ理解でき気が付くことができた箇所も少なくない。20年近い勉強のおかげで、偉大な先輩たちの言葉に共感できる部分が少しだけ見えるようになってきたわけである。次の報告では、それらを生かしながら、自分史作りの指導と学生たちの反応についてまとめていくことにしたい。

註

- 1) あいにく、新聞記事は切り抜きの現物が行方不明で、日付部分の入っていないコピーが手元に残っているだけであるが、内容と前後の経緯から平成2または3(1990～91)年の前半に『朝日新聞』に掲載されたものと推察される。矢吹氏に問い合わせたところ、氏自身はすでに担当ではないが、同校での自分史の制作は今も続いているとのことであった。
- 2) 受講者の数もその時々でかなり変動がある。平成2年度17名、平成3年度25名であったのが、小学校免許の資格取得の履修要件が変更されたため、平成4年度からは当該学年のほぼ全員が受講するようになり80人前後の時期が続いた(平成10年度は最多の50人が自分史を執筆)。平成15年度からは児童学科で保育士資格が取得可能になったことで、全体に取得希望の資格と受講科目の分散化が進行。また、「社会科概論」への名称変更で小学校関係という位置付けが明確になったこと

- で、保育士希望者がほとんど取らなくなり、受講者は減少傾向にある。平成20年度は48名。
- 3) 色川大吉『自分史—その理念と試み』講談社、1992年、15; 245頁。
 - 4) 同書、15-16頁。
 - 5) 後述のように、色川は橋本義夫の「ふだん記」を「自分史」の前身と評価しており、彼が橋本の業績を紹介したことが「庶民の文章運動の一つとしての自分史を流行させることになった」と述べている。色川大吉『自分史』15頁。
 - 6) 中里富美雄『自分史入門』東京書籍、1991年、20-24頁。『自分史のつくり方』（主婦と生活社）10頁。
 - 7) 小学館『言泉』初版（1986年）；講談社『日本語大辞典』初版（1988年）『大辞林』初版（1989年）；岩波書店『広辞苑』第四版（1991年）；角川書店『大辞源』初版（1992年）；講談社『新大辞典』初版（1993年）など。
 - 8) 色川大吉『常民文化論 色川大吉著作集第3巻』筑摩書房、1996年、507頁。
 - 9) 例えば、黒柳徹子の『窓際のトットちゃん』は小説風にまとめた自分史である等々。作家・タレントなどの文化人、スポーツ選手、政治家、実業家など、多くの有名人の回想本が紹介されているが、「自分史」という語を題に使っている本は1つも無い。『自分史のつくり方』（主婦と生活社）26-28頁。
 - 10) 自費出版ネットワーク主催の「日本自費出版文化賞」など。現在、各地で開催されている自分史コンクールの公募情報は、日本自分史普及協会のHP (<http://www.csc-21.com/newpage11.html>) で参照できる。
 - 11) 最初の事例：『農業技術』36-（1~6）（1981/01~06）の児玉賀典「農業経営覚書 試験研究機関での自分史」と題する連載もの6編。また、80年代の掲載誌は他に『技術と人間』、『金属』、『計測と制御』、『建設機械』がある。
 - 12) 一例として、昭和57（1982）年の該当件数はその前後と比べて突出して多いが、61件のうち59件は、『計測と制御』（計測自動制御学会）に連載された学会創立20周年記念企画の記事で、会員である各技術者が20年を振り返った「計測と制御に関する自分史」である。他にも、データベースへの登録の進捗状況に左右される部分もある。この種のデータは常に変動するものであり、利用にあたってはあくまで検索時点での結果と心得るべきであろう。
 - 13) 「私の物語・日本自分史大賞」（平成8年創設）は日本自分史学会主催で、同会の土橋寿会長は自分史専門図書館である日本自分史文学館を平成4（1992）年に開設。また、「日本自費出版文化賞」（平成9年創設）は色川大吉が審査委員の1人である。他の賞は前掲(10)のサイトを参照。
 - 14) 社会学では調査手法の1つとしてライフ・ヒストリー（生活史）法があり、生活記録の1つとして自分史が利用される。詳しくは、谷富夫編『ライフ・ヒストリーを学ぶ人のために』世界思想社、1996年（新版：2008年刊行予定）を参照。
 - 15) 色川大吉『自分史』17頁。
 - 16) 同書、37; 247頁。
 - 17) 中里富美雄、前掲書、20-24頁。『自分史のつくり方』（主婦と生活社）36-37頁。
 - 18) 色川大吉『自分史』17; 24頁。
 - 19) 同書、37頁。中里富美雄、前掲書、64-98頁。
 - 20) 例外を挙げだすときりが無いが、日記的な文をネットで公開するブログについては、また別に議論する必要がある。
 - 21) この違いは日記形式で自分史を書くこととは別の話である。例えば、『自分史のつくり方』（主婦と生活社）26-27頁、「書簡集や日記も自分史になる」を参照。
 - 22) 色川大吉『自分史』39頁。
 - 23) 『自分史のつくり方』（主婦と生活社）19; 25頁。
 - 24) 中里富美雄、前掲書、24頁。
 - 25) 色川大吉『自分史』18; 246頁。
 - 26) 升味準之輔『なぜ歴史が書けるのか』千倉書房、2008年、308頁。
 - 27) すでに引用した中里富美雄『自分史入門』などの他、色川が紹介する、橋本義夫『だれもが書ける文章』講談社、1978年；鈴木政子『自分史・それぞれの書き方とまとめ方』日本エディタースクール出版部、1986年の2著も、早い時期の自分史マニュアルの代表である（『自分史』18-36頁）。また、質問に答えて必要事項を書き込んでいけば自分史ができて上がるという手軽な記入式本も何種類か出版されている。野口悠紀雄『「超」自分史ガイド』も後半の第2部は「私の記録」という記入欄である。
 - 28) 『自分史のつくり方』（主婦と生活社）18-19頁。
 - 29) 色川大吉『自分史』40-41頁。
 - 30) 野口悠紀雄、前掲書、1-3; 19-20頁。
 - 31) 色川大吉『自分史』15-16頁。